

<p>家 庭 〔6年B組〕</p>	<p>「衣服を気持ちよく」 ～自分のテーマをもって対象にはたらきかける家庭科学習～</p>	<p>藤原ゆうこ</p>
-----------------------	---	--------------

1. 題材について

(1) 題材設定の理由

① 題材を設定するにあたって

子どもたちは、家庭科の授業が好きである。そんな子どもたちがイメージする家庭科の授業は、「調理実習や裁縫」など活動の印象が強い。例えば、本題材「衣服を気持ちよく」で学習する衣生活の内容においては、エプロンやナップサックなどの製作、いわゆる「ものづくり」をイメージすることが多い。調理実習や衣生活に関してのものづくりは、現状の食生活や衣生活、住環境などの見なおしや、基礎的な知識や技術の習得にもつなげるだけでなく、自己表現であったりグループ活動であったりと、楽しい内容であるからこそ、子どもたちにとって印象的なのだろう。

家庭科の学習内容の中で「衣生活」の領域、特に「気持ちのよい着方」にかかわる学習は、子どもたちの興味・関心は決して高いとはいえない。前述したような具体的活動が少ないからである。しかし、気温や季節の変化、生活場面に応じた衣服の着方、衛生的で実用的な手入れの仕方などを正しく知ることは必要なことである。そして、子どもたちが、日々の生活の中で体感したり、実践したりしやすい内容でもある。

子どもたちが興味・関心を高めながら学習し、気持ちよく衣服を着ることの中身を考え、自らの生活で生かそうとする意欲がもてる家庭科の授業を行いたいと考え、「衣服への関心」と「生活に役立つ物の製作」を関連させ、全8時間(さらに、今回の題材学習と関連させてそうごうの時間3時間で、ファッションショーを計画)で題材を計画した。

② 子どもの実態と本実践での主張点

子どもたちにとって、衣服選びの基準は流行のデザインやブランドが中心であり、保護者が選んだものをそのまま着たりという子どももいた。自分の衣服を手入れしたり、実際に洗濯した経験のある子どもは少ないというのが実態であった。

例えば学校生活の中では、体操服を洗わずに何回も着ている子どもや、上靴を何週間も持ち帰って洗わずにいる子どもがいるというのが現状がみられた。「暑いから…」と夏に靴下をはかずにくつをはいている子どもを見かけたりすることもある。冬になると、「面倒…」などの理由で、教室でもコートやジャンパーをぬがずに、また、手袋やマフラーを着けたままの状態でごろごろとする子どもを見かけることもある。

本題材を学習する「意味」とは、衣服を着ることの本来の目的や、適切な手入れの仕方などを知ることによって、生活の中で自分にふさわしく衣服を取り入れていこうとはたらきかけていくことである。「内容」とは、学習のもつ意味を獲得し、ひろげていくために行う学習活動である。前述したような子どもの実態は、衣服(肌着)が汗を吸うなど、汚れを付着させることによって身体を清潔に保つという衛生的な役割を持っていること、重ね着によって温かさが保たれ、体温調節を行っていることなどに対する意識の低さのあらわれであろう。「意味と内容」がひろがる学びとは、このような実態をなくしていくよう、

子どもたちが、本来の衣服のもつ役わりに気づき、どのような着方をすることがよりよい生活につながるのか考え、実生活にはたらきかけていこうとする学びである。このような学びを展開していくために本題材では、

- (a) 布には大きく分けると2つの構造「織物」「編物」があること
- (b) 布の構造によって通気性や吸水性、伸縮性に違いがあること
- (c) bの性質や布に付着する汚れと大きく関係しているものは空気であること
- (d) 衣服や汚れの種類、汚れの付き方に合わせた手入れのしかた

以上のことを大切にしながら学習をすすめ、生活場面にあった気持ちのよい衣服の着方の実践につなげていきたい。「気持ちがよい」という感覚は個人により異なるものである。子どもたちが楽しみながら意欲的に学び、より明確に違いを感じたり納得したりできるための手だてを、次のように考えた。

- (e) 内容に適した実験や観察をとり入れた授業を展開する
- (f) 第1次（全3時間）は子どもたちがよく汗をかき、暑さを感じる7月ごろに
第2次（全5時間）は、汗の汚れや泥汚れなど、衣服の汚れを実感しやすい
スポレク後の10月ごろに行う
- (g) 構造の違いを実感しながら楽しんでものづくりを行えるよう、「織物」「編物」
を利用した小物作りなどの活動を取り入れる

(2) 題材目標

- ◇自分の日常着に関心をもち、自分の課題を解決しながら気持ちよく衣服を着ようという態度を育てる。
(関心・意欲・態度)
- ◇自分の生活にあった着方や手入れの仕方を考え、気持ちよく着るためのよりよい方法が工夫できるようにする。
(生活を創意工夫する能力)
- ◇日常着にあった洗濯（手洗いを中心）や手入れができるようにする。(生活の技能)
- ◇衣服のはたらきや手入れの必要性、方法を理解し、生活場面や気候にふさわしい着方ができるようにする。
(家庭生活についての知識・理解)

(3) 題材計画 (全8時間+3時間)

第1次 わたしの着方、さわやかに！ (3時間)

第1～2時 『衣服を涼しく着よう』

- ・身の回りにある布で作られたものを観察する
- ・季節や活動によってふさわしい布地や形・着方があることに気づく
- ・布には“織物”“編物”があることを知り、それぞれの性質（吸水性・通気性・伸縮性）と空気とのかかわりを、実験や観察を通して知る
- ・衣服のはたらきから、涼しい着方について考える
- ・“織物”“編物”をもちいた小物作りを通して、布の構造を実感する

第3時 『衣服をあたたかく着よう』

- ・空気とのかかわりから、効果的な重ね着のしかたについて考え、実験や観察を通して確認し、あたたかい服の着方について考える

★『涼しい着方・あたたかい着方』

ファッションショーを開こう！』（そうごう3時間）

暑い夏の日・寒い冬の日を想定し、より効果的な“涼しい着方”“あたたかい着方”を表現しよう！

- ・グループごとに、自分たちが選んだテーマにあう衣服の着方を考える
- ・ファッションショーを開き、互いに工夫したところを発表し、交流し合う

第2次 すっきりさわやか！洗たく名人（5時間）

第4～6時 『衣服を気持ちよく』（本時1／3）

- ・汚れた布と清潔な布について、実験や観察を通して比較する
- ・汚れた衣服の機能は低下するため、衣服の機能を回復させるための手入れが必要なことを知る
- ・気持ちよく衣服を着るための、手入れのしかたについて考え、調べる。
- ・汚れにあった洗たく方法を調べ、手洗いを中心とした洗たく実習をおこなう

第7～8時『地球にやさしい衣生活』

- ・衣服を長く利用したり、無駄のない洗たく方法を取り入れるなど、工夫することが環境に優しい衣生活につながることに気づき、衣服の再利用などについて考える

2. 題材の考察

（1）互いのまなざしが共鳴する実際の姿

第1次「わたしの着方、さわやかに！」では、布の構造が異なる同じ綿の布（織物＝シャツ・編物＝パジャマ）を使ってその性質を確かめるために、布の吸水性・通気性・保温性を確かめる実験を行った。そして布の構造と空気の含まれ方が実験結果と関わっていることを学習し、生活場面・気温や季節の変化に応じた気持ちのよい衣服の着方について、根拠をもって考えることができた。

着目児☆は、家庭科の学習の中で、「衣生活」の分野に関しての関心・意欲は高いわけではなかったが、流行のデザインや色にかなり興味をもっていた。もともと肌が弱く、特に夏はかゆくなったりすることの多い☆児には、デザインだけでなく、衣服の機能にも関心をもち、生活に生かしてほしいというねがいから、とにかく学習を楽しみ、衣服のはたらきを実感してほしいと考えた。

着目児※は、家庭科の学習への関心・意欲が高く、また、好奇心旺盛である。自分が知ったことや考えたことを、自分の生活の中に工夫しながら取り入れようとする姿がよくみられる。特に「食

〔着目児☆〕服って、毎日着ていて身近にあるものだけど、今まで細かいことまで、調べたり考えたりしたことはなかった。衣服のはたらきがよくわかったし、服を選ぶときは暑い・寒いなど気候のことも考えた上で、色やデザインなんかも考えたい。

〔着目児※〕すごく、自分のためになる授業だった。実験では、特に通気性のことがよくわかった。今までは“デザイン”が大事だと思っていたけれど、これからは、“涼しさ・あたたかさ”と“デザイン”の2つになった。

に対する学習が大好きで、朝食作りやお弁当作りなどの学習を行う中で、楽しみながらバランスよく健康的に食べようと意識している。※児は、実験や観察を行う際に、予想したり結果の原因を考えることに大変興味を示す。この題材を通して「衣生活」にも関心を持ってもらいたいと考えた。

第2次「すっきりさわやか！洗たく名人」の学習では、同じ構造（織物を利用）の白布を用いて第1次と同様の実験を行った。違いは“清潔な布”なのか“垢や汗などの汚れが付着した布”なのかである。この時、子どもたちは“清潔な布の方が、通気性・吸水性ともに高いと予想した。空気の含まれている部分に汚れが付着していると水を吸うのにじゃまになったり、空気が通るのをじゃまするから”という根拠を持ってである。実験結果は子どもたちの予想通り。第1次で獲得した学習の意味を子どもたちは次の学習へ生かそうとひろげていったのである。実際に電子顕微鏡で自分たちが事件に使用した布を見ることがによって布に付着した汚れが繊維や織り目の間に入り込んでいところを実感として見ることも出来た。衣服が、体や外部からの汚れを取ってくれ

ていたというはたらきに気づき、汚れた衣服はそのはたらきが低下するということを確認したことによって、洗たくの必要性を実感しながらの実習へとつながった。

洗たく実習では数日前に付いた汚れを落とそうとしていたののだが、☆児は同じ汚れでも落ちやすい場合と落ちにくい場合があるという日頃の生活体験を振り返り、「ついてすぐの汚れだったら落ちやすいかも」と試しながら、自分で学習内容をひろげていった。このような学習のひろがりから、子どもどうしのまなざしが共鳴しあうこととなり、「私も前からの汚れと今付いた汚れを洗い比べてみよう」「やっぱり泥汚れは、洗たく板を使うと汚れが落ちやすいよ」「プラスチックの洗たく板より、昔ながらの木の洗濯板の方が使いやすいね」など、子どもどうしでよりよい方法を発見し合ったり交流し合ったりする姿と「本当だ！」「すごいね！」など実感し合う姿が見られる学びとなった。

〔着目児※〕 服は汚れるから何

となく洗濯しているけれど、こんな大切なはたらきをしているとは思っていませんでした。汗まみれの体操服は、きちんと持って帰って洗わないと…。家庭科の「衣」の勉強も大切だなと思いました。

〔着目児☆〕 今までは何も考え

ずに汚れたら洗たく機にほりこんでいた。今日の実習で墨の汚れを落とそうとして、もみ洗いしてもたたいもなかなかきれいにならなくて大変だった。でも、墨が付いてすぐに洗うときれいに落ちた。汚れって付いたらできるだけすぐに洗うことも大切なんだと思った。

3. 成果と課題

布に空気が含まれていると言うことに着目して題材を計画していったことにより、子どもたちは体系的に着方学習をすすめ、自らの生活に生かす学びへとつなげていけたのではないだろうかと考えている。授業の中に、実験や観察を取り入れていくことによって、子どもたちの興味・関心は予想以上に高く、正しい知識を習得するという面においても有効であった。小物作り（織物＝プロミスリング作り、編物＝あみぐるみ）を通して、楽しみながら布の構造を実感できたこともよかった。今後の課題としては、“あたたかい服の着方”“保温性の実験”を夏に行うことに多少無理があったことである。年間計画の中でどのように位置づけていくべきなのかを検討する必要があるだろう。